

あとみよそわか、の話

わたしはダメな少女でした。ヤンキーと呼ばれることもしばしばでした。昔風に言えば、不良少女だそうです。お母さんとお祖母ちゃん（ばあちゃん）がキッチンで立ち話をしていた時に、ふっと、わたしの耳が不良の言葉を捉えたのです。まったく、あんな恰好して、とか、髪を染めたんだね、とか、低いドラ声のお祖母ちゃんがお母さんへ小言とも非難とも付かない文句を浴びせていました。お母さんはそれにいちいち反応せず無視しているようでした。お祖母さんの言い分は、孫娘のわたしへの非難ばかりでなく、そんなダメ娘に育ててしまった己の娘であるお母さんへ向けられている節もあるからです。母子家庭であっても健やかに育っている家庭はゴマンとあるのに依りによって自分の孫が人様から後ろ指を指されかねない有り様であるとは予想さえしなかつたのでしよう。わたしは思わずペロツと舌を出してしまいました。お祖母さんが憎らしく思いました。何だか知らないけれど、わたしをチラツと見て中学校の生活指導の先公みたいに服装や髪をチェックをやたらといれるのです。無論、お母さんも胡散臭い目付きでわたしを眺めるけれど、もう仕方ないと諦めている様子もあります。お祖母さんとは同居ではありません。一人でマンションに住んでいて、アタシが病気になったら四人の子供達に面倒してもらおうから、と常日頃平気で言っています。次女であるうちのお母さんは朝早くからのビル清掃、午後からは介護施設での二つの清掃作業でわたしと二人きりの生活を支えてくれています。身体（からだ）が疲れるらしいのです。まだ五十歳になつてないのだから他の職業（ほか）を考えたらよさそうなのに融通が利かない母親です。高校中退というから中々良い仕事へ就けないかも知れないのです。お祖母さん家（うち）はお祖父さんが水道工事に携わっていたのですが、わたしの小さい頃に亡くなりました。お母さんの兄妹は四人で、うちのお母さんは三番目です。長男の伯父さんはお祖父さんの後を継いで東京下町で水道工事業の請負をやっています。長女である伯母さんは珍しく女性警察官でしたが同じ警察官同士で結婚して今は九州へ移り住んでいます。オジサンが鹿児島出身で故郷へ帰ったからです。下の叔母さんは看護師の資格を取って千葉市の大病院に勤めています。独身です。姪のわたしが可愛らしくて小さい頃はあちこちへ連れて行ってくれました。今はたまに携帯で話すぐらいです。お母さんが高校を中退した理由は聴いたことありません。知らないけれど何か親へ反抗したこともあるのでしょうか、それとも言えないような事情でもあって中退してしまったのでしょうか。詳しく聞

けば直ぐ口げんかになるので止めています。わたしはわたしの父親のことだつてろくに知りません。もの心付いた時から父親というものが居ないのだから淋しいと思つたこともないのです。千葉の叔母さんが一度だけ、お父さんが居るようなことを言いました。再婚しているらしいのです。が、わたしは別に逢いたいとも思いませんでした。ただ、お母さんは一人っ子のわたしには密かに大学へ行つて欲しかったようですが中学生の頃にすでに諦めてしまつたようです。従兄弟達には大学へ進学した子がほとんどだからお母さんも一応、片親ながら何とか大学進学をさせてあげたいと内心は考えたのでしよう、それに兄妹への見栄もあるからでしょう。ところが肝心のわたしが小学生の六年生頃から勉強嫌いになり中学生では成績も素行も悪く、それで学校でも目立つた不良生徒でお母さんの目論見は完全に外れてしまつたのが現実でした。わたしがヤンキーとかバリバリとか同級生から呼ばれるのは自分でもその理由が分かりません。お父さんが居ないのが理由なの？と一度お母さんから聞かれたことがあるけれどわたしには返事のしようがないのです。べつにー！と答えるのが癖で何ごともこの頃は、べつにーで通しています。一時は渋谷の街を夜通し徘徊したこともありました。同じような子がたむろして直ぐに仲間になるのです。チーマなんかたくさんいます。お金が無いは持つている子が出て食事やゲームをして遊びます。でも、うんこ座りはいしません。全員が空つケツになれば赤テープです。空手をやった子がいてほかとタイマンするのです。滅多に負けません。負けたチーマからカツアゲするのです。あとは一人が勇気を出してオジサンをゲットしてお小遣いをねだるのです。簡単ですよ、その代わり、下着を上げたり胸を触らしてあげるのはです。これはみんな、やります。或る時、在日の子がサツにパクられてしまい、辛ずる式にわたしを含めて6人が逮捕されてしまいました。ドジな子で張り込み中の私服のお巡りの腕を掴んで囁いてしまつたらしいのです。わたし達はパトカーで連行され別々の個室でこれまでの経緯をこてんぱんに絞られました。結果、年少に送致された仲間二人とわたしのようにお母さんが懇願して身元引き受けて保釈された子が四人。お祖母さんにはパクられたことは内緒にしてあります。判つたら後が大変です。時々少年係とかいうお巡りが自宅へその後のわたしの様子を電話で聞いて来るようです。

しばらくは家に閉じこもつて何もしてませんが、そうしていると若いわたしの身体は爆発してしまいます。お母さんの眼を盗んで再び、渋谷周辺をほつき歩きました。そうしてまた、新しいチーマを作つたのです。と言っても旧メン

バーが三人いる五人です。合言葉は、あとみよそわか、です。始めは何のことやから分からなかったのですが、新入りに割と家が裕福らしい子がいて、その子が何だか意味不明の、あとみよそわか、あとみよそわかと必ず呟くので、それを採用したのです。何？、何？残りの四人の子が彼女の呟きを覗き込むのですが、その子が言うには、ウチの台所の隅に、貼り紙があつて、その字が書いてあるから黙つて使つているのだと説明しました。ヤバツ（ヤバイ！）と思う時に、代わりに、あとみよそわか、を言うのだそうです。意味は知らないと言います。メンバーが口々に言うには、きつと神様のお払いか何かだよ。それでも珍しい言葉のせいで今どきの、ヤバイ！とかナウい！などよりよっぽど秘密めいていいということ、わたし達の意見が一致しました。あとみよそわか、あとみよそわか、は、つまり、ヤバイ、ヤバツ、と言う時に使う文句のことでした。・・・交番の前を歩きながら、あとみよそわか、を連発しているとお巡りは、わたし達を見て怪訝な表情をします。ザマーミロ！お前なんかに分かつてたまるもんか！そう喜ぶわたしだつて何も意味が分からないのだからお笑いです。それでもわたしは勝ち組のような気分になりました。けれどももう一人の新しい子の手癖が悪くて、或る日、置き引きをしてポリ公にパくられました。幸い、その子だけの犯罪だったのでわたし達は無事でしたが。二度と警察での取り調べはイヤだったから、その子の迎えにも行きませんでした。多分、年少送りになると思います。その子はわたし達のグループから離れました。姿も見せなくなりました。院卒になつても今後わたし達とはダチにはならないでしょう。残つた四人は盛んに、あとみよそわか、をオマジナイのように言い合います。あとみよそわか、あとみよそわか・・・

ところが不思議なことが起こりました。或る夜、バスケ通りを歩いているところから五、六人の連れ立つたオジサン達が腕に腕章を巻いてギョロ目を作りながらやつて来ます。渋谷商工会の有名な見回りです。S C G P（渋谷センター街パトロール隊）のオジサン達でした。たちまちわたし達は、あとみよそわか、を叫びました。オジサン達は客引きの兄さんたちを叱り飛ばしたり自転車に乗る若い男には注意をしています。オレ達の街、渋谷を明るく健全にしたいんだ！そんな声が聞こえました。わたし達とすれ違います。わたし達は、あとみよそわか、の呪文を唱えて神妙にします。すると、ツツーと一番年上のジイちゃんが目の前に立ちました。ねえ、ねえ、君たち、今、あとみよそわか、つて言っていたよな！と言うのです。わたし達四人は一瞬、固まりました。と、同時に、ヤバっ！と思いました。危険を知らせる暗号が裏目に出た？ののでしょうか。君達が言っていた、

あとみよそわか、って何処で仕入れたんだい？と聞くではありませんか。ポカンとしてゐるわたし達の様子を眺めていたオジサンは、偉いなー、そんな奥床しいことを知っているなんて！と急に褒め始めるのです。わたし達は何が何だか分かりません、まるで狐に騙されているみたいな気分になりました。あとみよそわか、を言う人なんか今では貴重だぞ、君達若い人が言うのは奇蹟に近いな、だから経緯いきまじりを聞かせてくれよ、それによつてはマックぐらいご馳走してもいいぞ、とまで言い切るのです。オジさん、わたし達を買いかぶりすぎてるよ、が本音でした。そんなことを考えていたらわたしの頭の中を見透かすように、台所の子がボソボソはなし始めるのでした。彼女は、オジさんとは目を合わせず、ウチの台所に貼つてあつたんです、と。オジさんはフーンと頷きながら、君のウチの台所にねえ、・・・とところで意味は知ってるかい？追いつけを掛けます。ううん、と軽く頭を左右に振る台所の子、でも、君のうちの誰かが知っていたんだな、まあ、いや！・・・あとみよそわか、ってのはね、ほら、みんなが掃除なんかするだろう、その時に、まだ拭き忘れたり掃除をしてない場所が無いかどうか、もう一度よく確かめて見ろよ、って意味だよ・・・掃除のあとを見よ、あとを見よ、って言うことだ、・・・そわか、は呪文と思えばいい、これが意味さ！・・・訳が分かつたような判らないようなオジさんの解説にわたし達は無言でした。よかつたらオジさん達の事務所へ来ないか、奢たかりはピザに格上げしてやるよ。その代わり、君達にも我々のお手伝いをしてもらいたいが、どう？・・・

その日はそれで銘々が帰宅しました。夜、台所の子からメールが来ました。一人の子が帰りにメンチ切りに遭あつて公園でタイムマンになつたそうでした。身体にアザが残っていると云っています。どのチームか知らないとも言うのです。院卒の連中かも知れません。みんなアイパーだったとも言っています。思わず、あとみよそわか、だったね、と慰めました。台所の彼女にも人に話せない悩みがあつてわたし達の仲間へ入つたのでしようから。

翌日の昼過ぎ、みんなで集合してオジさんがピザをご馳走してくれたビルの一階の事務所に行きました。ネイルなんかかしていて大丈夫かなと思ひました。おおっ！来たか、来たか、今日はマックを奢たかるぞ、とオジさんが声高に言います。事務所にはオジさんの外ほかに若い男が一人いるだけです。このビルは俺のビルだから心配しないでいよ、彼は俺の倅、もう結婚しているから・・・安心しなさい。今日は、何しに来たんだい？・・・ああ、そうかそうか、お手伝いのことか、難しいことじゃあない、一日おきの商工会の夜回りに一緒に同行してゴミなんか拾つて

くれればありがたいんだ！夜八時ごろと十二時ごろの二回、時間はせいぜい一時間ほど、若い君達がゴミ拾いするのはイヤだろうが・・・どうだろう、無理なら無理でもいいよ、どうしてもなんて言わないからな、・・・好きな服装で歩いてくれればいいし道具は全部こっちで用意する、・・・バイトと思えば・・・商工会で小遣いぐらいの金は出るよ・・・

わたしは内心、ラッキーと思いました。掃除なんてどうということもないからです。多分、みんなもそう思ったに違いありません。それから主には土曜日と日曜日の二日間、わたし達四人は一カ月、軍手をして45ℓ入りのゴミ袋とツマミバサミを持ってオジさん達と一緒に周回しました。睨め付けるような他のチーマもいます。でもわたし達は一向に平気でした。四人のお小遣いは一人一万円、夜食が付いてまあまあです。お母さんなんか本気にしなくて、あんた、それって援交じゃあないの？うまく騙されているんじゃない、なんて、マジでいうのです。無理ありません、不良少女グループが良く評価されることは滅多にないからです。

ところが更にラッキーだったのは、わたしがこのビルの事務員に採用されたことです。お母さんは菓子折りを持ちながら事務所へ挨拶に来ました。どんな具合か心配で様子を探りに来たのです。若社長の隣りで色々な書類の整理やら簡単なパソコン操作をしたりするわたしを見て驚いていました。パソコンは若社長が教えてくれます。学歴が無くてもそんなに難しくありません。若社長はカトリック系の学校の同級生同士の結婚で、子供が二人いて可愛くて可愛くてどうしようもないことなどお母さんへ話していました。今まで奥さんが受け持っていた仕事をわたしが代行してもらいたい、それは、マンション3棟の家賃の決済や入居状況等を含めた管理業務と呼ぶものだそうです。若社長が言うには、父である会長からの伝言は、あの子は根性がありそうでとても良い子だから使ってみたらどうか、と言われたのだそうです。その晩はわたしとお母さんと乾杯しました。珍しくお母さんが涙ぐんでいました。そうして一ヶ月が経ったら十万円のお金を給与として渡されたのです。三カ月は見習い期間、それが過ぎたら正社員で十三万円になるんだそうです。ボーナスも出す、と若社長は言ってくれます。トイレで思わず涙をこぼしてしまいました。泣きじゃくりながら、わたしはこの人達に絶対付いていくんだ！と決心したのです。お母さんに五万円上げて家の足しにするよと言いました。三万円は貯金、あとの五万円で衣装や遊ぶお金に充てる積りです。急にお母さんがニコニコし始めたのが気味が悪いくらいです。大人なんて現金な

ものだとつくづく思いました。

他の三人は、商工会の別のオジさん達のビルの二階でやっているコールセンター（通販）補助の仕事を斡旋してもらいました。三交代制、十五時間営業です。先輩の講師が丁寧に電話対応のマニュアルを教えてください、三人もイッパシの社会人〇〇になり始めました。夜間勤務などがあるので給料はわたしよりもいいくらいです。みんなも貯金して、パリへ旅行しようと約束してあります。わたし達は変わったのです。

あとみよそわか、の一言から始まった信じられないようなわたし達への福音（この言葉も若社長が教えてくれました）、わたし達四人は台所の子に感謝すると共に、通信教育でもいいから大学資格を得ようと話し合いました。・・・今では昔の面影はすっかりなくなり、四人のそれぞれが、しつとりした女らしささえ浮き出ているのです。109ビルには、もう足を踏み入れません、デパートに行くようになったからです。わたし達は逢えば自然に笑い転げ、あとみよそわか、の呪文だけは忘れずに口にしていきます。

人は誰か人を求めるものです。かつてのわたし達は様々な理由で非行へ走りしていましたが、それは飽くまでひとつの仮面にすぎません、本当は温かい人の眼差しを求めているのです。家族や親族ですら難しいことが、まったくの赤の他人が手を差し伸べてくれることだっているのですから、人生、生きていて無駄ではありません、価値があると思います。

自傷するみんな、苦しんでるみんな、絶対、命を無駄にするな！辛抱強く待てば誰かが手を差し伸べてくれるよ！・・・そうわたしは叫びたい、叫びたい。何だか知らないが、わたしは生活指導の先頭に立っている人みたい、うふっ！。

* * *

○チーマ 仲間、集団、組織のこと

○年少、年卒 少年院のこと

○バリバリ ヤンキー的で凄くいけること

○アイパー アイロンを使って掛けるパーマのこと

○赤テープ 喧嘩買いますということ

○タイマン 一対一で勝負すること

○メンチ切り 眼がをつけること

○バスケット 渋谷センター街メインストリートのこと

○ポリ公、先公

警官・・・教師・・・のこと